

イタリアの靴底滞在記 (2009年6月16日-21日)

初めてのイタリア。ローマもミラノもヴェニスもフィレンツェも寄らず、イオニア海に面するリゾート地へ仕事に行きました。いつものように気のついたこと、思いつくままを記しました。今までの旅行記と違って写真を何枚か入れています。書き上げてから読み直してみると、一所に閉じ込められていたとは云え、イタリアの描写はほとんどなく、旅行記の体を成していない。だから滞在記。悪しからず。

6月16日(火) 水戸も成田もローマもバーリもノヴァ・ヤルディニアもどこも晴れ

今回は荷物が少ない。機内持ち込み手荷物だけでチェックインバゲージはない。少々重いが大き目の手提げの旅行バッグひとつに納めた。洗濯をすればいいと、この前のウィーン出張で覚えたので、下着も日数分だけは持たない。

09:13 水戸駅南口発のローズライナー。飛行機が午後の便だから、いつもの早朝6時台のバスでなくても間に合う。6時台のバスより乗客は格段に少ない。

水戸から乗ったおばさんと、途中鉾田から乗ったおばさんは、韓国行きらしいが、隣同士に座ってしゃべりやまない。そういうご婦人はどこにもいる。朝のJR特急ひたち号はビジネス列車と化し、皆新聞や雑誌や会社資料に目を通すか居眠りをして車内は静寂なのだが、かようなご婦人たちはそういう場であることを感じない。いや理解しない。ルールじゃないからしゃべっていても構わないのだけれど、「ながら」が苦手な僕にとっては、あのおしゃべりを聞きながら読書をしたり考え事したりが出来ないのだ。そういうわけでトイレに立ったついでにひとつ離れた座席に座り直した。おばさん達のすぐ後ろに座っていた若い男女はとうの昔にうんと後ろの、声害が及ばない座席に避難していた。

アリタリア (Alitalia) 航空は成田空港第一ターミナルの北ウィング。空いている便なのか全く並ばずにチェックイン。僕の旅程表を見ながら係の女性がどこかに電話をする。「ローマでのバーリ行きの乗り換え時間が1時間しかないが大丈夫か。予定より1時間後のフライトにも席は残っていることは確認したが。」と気を遣ってくれる。

そうなんだ。今回の旅程づくりは失敗した。忙しさに紛れて、旅行社から示された旅程表をよく吟味もせずにOKを出してしまった。それで目的地に着するまで、実は気が気ではなかったのだ。

成田 13:20 発ローマ同日 19:00 着、国内線に乗り換えてローマ 20:00 発バーリ (Bari) 21:00 着。問題はバーリ空港から仕事場のあるホテルまでの足。仕事場とは、イタリアを長靴に見立てたときの靴底の部分にある港町、ターラント (Taranto)。その街の西の郊外にノヴァ・ヤルディニア (Nova Yardinia) というリゾート地がある。その Nova Yardinia

Convention Resort で開かれる国際会議というか研究発表会への出席が今回の仕事。

成田空港で両替 ¥49,805 → €350.00。レートは ¥142.30/€。海外旅行保険と貴重品を入れて肩から提げておく袋を買う。暑いと上着など着ないだろうからポケットがなくなるからね。

パスポートコントロール通過後アフターシェーブクリームを買うのを思い出し免税店へ。店員に聞けば「こちらです」と大手ブランド品を勧められる。アフターシェーブ程度でケチる必要はないのだが、僕の場合は単に湿分を保持してくれればそれでいい。結局出発ロビーの何でも屋さんで尿素配合何とかを買う。

出発ロビー。年配同士、西洋人カップル、日本人では女性の一人旅風が目立つ。そんなに魅力のある国なんだろうか。

搭乗。いよいよ初のアリタリア航空。クリスマスカラーの緑色。

席はエコノミークラスの前から2番目、真ん中の列の通路側。ほぼ満席の様子。左隣は韓国人の中年男性。大学の先生か牧師さんかも知れない。

機内映画2編:『リボリューショナルリー・ロード/燃え尽きるまで』と『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』。2本とも見ごたえがあった。

『リボ...』はレオナルド・ディカプリオとケイト・ウィンスレットで、あの『タイタニック』のコンビ。夫婦も本気で喧嘩をすとなるとあそこまで悪態を憑くのだ。ケイト・ウィンスレットは目鼻など顔の造作が顔の面積に比べて大きいのだが、その表情は天海祐希のそれに似ている、とつくづく思った。人を睨み付ける瞬間ハッとしたが、気をつけて見ていると大抵の表情がそっくりだ。

彼女はこの映画では2008年オスカー候補にさえなっていないが、同じく2008年封切りの『愛を読む人』(“Reader”)とかいう、これも機内映画リストにはあったのだが、別の映画で主演女優賞を獲得している、ということを知った。

『ベンジャミン...』は、年老いて生まれてだんだんと若くなっていく男の話。この男をブラッド・ピットが演じ、彼と生涯係わった女性をケイト・ブランシェットが演じた。2008年アカデミー賞の作品賞、主演男優賞他にノミネート、美術賞などでオスカー。

ブラッド・ピットの養母を演じた女性がなかなかよかったと思っていたが、彼女はタラジ・P・ヘンソンという、あまり映画出演が多くない俳優だった。

何の賞にもノミネートさえされなかったが、ケイト・ブランシェットは存在感があった。アカデミー賞会場でも「大女優の風格」を漂わせていた、と何かの記事で読んだ。

ちなみにこの年の作品賞は『スラムドッグ&ミリオネア』。外国語映画賞が『おくりびと』。この前パリへ向かう飛行機の中で観た『チェンジリング』のアンジェリーナ・ジョリーは主演女優賞にノミネートされていた。

機内で UNICEF への募金袋が配られた。「募金をお願いします。どのような貨幣でも結構です。この袋に入れて係員にお渡し下さい。Grazie! Thank you!」。航空会社として協力しているのだろう。日頃季節、季節のユニセフカードなどを買っているので今回の募金は見送り。

映画を観ている間とはともかく、終わった後はまたまたパリから先の足が気になって仕方がない。今回の会議場所は空港から 80 km も離れた、決して公共交通機関が便利ではないところにあるので、会議初日の前日と最終日の翌日には参加者が一斉に動くためシャトルバスが手配された。一方、それ以外の日に移動する参加者のためには、会議事務局が契約したタクシーを用意してくれている。片道€100。4人まで何人乗っても€100。

僕はこれを利用して会議場まで行かなくてはならないのだが、事前に web 上で予約しておく必要がある。飛行機の到着時刻を知らせておくのだが、これを忘れていて連絡が出発直前になった。このため本当にタクシーが着てくれるのかどうか確認がとれないまま飛行機に乗った。

なんせ、夜暗くなってから地方の空港着である。パリのシャルル・ド・ゴール空港やドイツのフランクフルト空港のように鉄道が乗り入れているわけではなく、迎えに来てくれなかったら一般のタクシーを使うかない。間違いなくボラれる。

出発前日に上野駅構内の書店で『地球の歩き方』を買い、電車内で読んだ。イタリアと言えはスリと詐欺としかイメージがない僕は、早速治安と旅の注意事項に目を走らせる。案の定、とにかく会う人はスリだと思え、とは書いてはないが、相当な覚悟が必要。小心者の僕はその 5 ページほどを読んだだけで怖気づき、ほかのページの行楽地案内に目を通す心の余裕を失い、飛行機の中でひたすらタクシーが迎えに来ることを祈るばかりなのでした。何年か前に読んだ村上春樹の旅行記『遠い太鼓』にあったローマの治安の悪さが妙に頭に残っているのも、僕があまりイタリア行きに乗り気になれない理由なのだ。単純ですが。

イタリア行きが決まったときは、実は列車移動さ

え考えていた。欧州では鉄道に乗りたくなる。これまで、仏、独、白耳義（ベルギー）で列車に乗った。国によって列車のデザインが違い、乗るだけでも面白い。しかし、今日パリからターラントまで列車を使うのなら、パリに明るいうちに到着するように日程を組むべきだった。ローマかパリで 1泊だろう。

夜 9 時にパリに到着して、もし鉄道で移動するとなるとどうなるか。パリ空港から市内の中央駅まで 9 km。Thomas Cook 時刻表によれば、パリ 22:13 発ターラント 23:19 着、またはパリ 22:56 発ターラント 00:29 着。もちろんローカル列車である。後で聞いたが、ターラントの列車の駅から会議場所のリゾート地まで 20 km で、タクシーしか移動手段はない。イタリア語を解しない見知らぬ一人旅で、真夜中のイタリアのタクシーに乗り、きっと乗客もまばらに違いない列車に 1 時間余りも閉じ込められる。イタリアはスリと詐欺の国なのだ。何度か身ぐるみ剥がれるに違いない。日本の特急列車のように SOS ボタンなどついていない。タクシー、列車、タクシーと 3 回も被害にあう機会を作るより、パリ空港からターラントまで一気にタクシーで、と悲壮な覚悟をしたのだった。

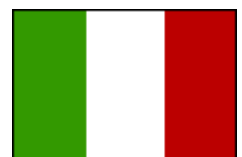
今まで旅で被害にあったことがないのも却って不安感を助長させる。被害にあったあとの対処の仕方も知らないし、今さら何かを準備できるわけではないし、それに行き先が田舎だから、公的機関もないだろうし、あったとしても機能していないだろう・・・などと、どんどんネガティブ・スパイラルに入っていく。

・・・であるので、パリ空港で会議名が書かれたプレートを抱えた若いタクシー運転手を見かけたときは、本当に嬉しかった。これで今回の出張は無事成功とさえ思った。

話が一気にパリまで達してしまった。少し戻そう。

成田を出たアリタリア航空 784 便は、19 時ころ予定通りローマ空港に到着。成田から 9,858 km。(因みにパリから 1,094 km。) 気温 29℃ とのアナウンス。これは暑そう。以前はレオナルド・ダ・ヴィンチ空港と呼んでいたが、今はフィウミチーノ空港というらしい。フィウミチーノ市にあるから。

アジア方面から到着する飛行機はターミナル C へ。ターミナルへ入るとすぐにスカイブリッジシャトル（シャトル電車）に乗って空港中央部へ移動する。ここで入国。パスポート審査を通過。問題なし。パリの乗り継ぎ便が発つ A24 ゲートへ向かう。通路は広く、行き先表示はわかりやすい。まったく迷うことはない。通路の両側には化粧品やバッグなどブラ



緑は国土、白は雪、赤は情熱を表す。人口 5,800 万人、国土面積は日本の 4/5。

ンド店と、さすがイタリア、食べ物屋さんや並ぶ。どこかの店でも入ってコーヒーでも飲みたいが、乗り継ぎまで1時間弱しかないのでのんびりしてられない。

途中の壁に化粧品か何かの大きなポスターがあり、口から牙がのぞく女性の足元に赤ん坊が二人。ローマ誕生の伝説とはちょっと違う気がするが、暗示しているのか？巫女シルウィアが生んだロムルスとレムスの双子の兄弟は最初狼に、その後羊飼いに育てられ、ローマを築いた。女性に見えるのが狼か…。

A24 ゲートは延々と先にあり、その建物の最先端の階段を下りる。そう搭乗口は 1F にある。ちょうど羽田空港で稚内便のそれのように。羽田と違うのは、ここから出る飛行機はまだ南に向かうこと。

外気が入り込みやすいこの 1F の出発ロビーはエアコンがあまり効いていない。ムツとする。外を見ると日差しが強そう。そうそう時刻は今夕方 7 時半頃なのだが、日はまだまだ高い。この分だと 9 時頃でもまだ暗くはないのではないかと。そう思いたい。

そうは思っても、搭乗を待つ間もバーリからのアシが気になる。携帯電話で先に到着している H 大の S 先生へ連絡しようとするものの繋がらない。2 度、3 度と試みるが繋がらない。電子メールが届いていないかパソコンを開いて見るも、無線 LAN は接続しない。そのうち搭乗が始まる。

搭乗といってもまずバスに搭乗。エプロンを走り飛行機へ。飛行機の種類は知らないが、2 列+3 列座席の中型機で、アリタリア航空と AIR ONE とかいう会社の共同運航便である。

僕は最初のバスで飛行機に到着し、さっさと座席に座りこんでしまったのだが、後から来ること来ること、ノンビリと。僕の隣の空いている席に座るのか座らないのか、通路に突っ立ったままの背の高い初老の男性。そんなところに立っていたら人が通れないじゃないかと思うが、一向に構わないらしい。そのうち徐に床に置いた荷物をオーバーヘッドに入れ始めたが、何となくもいくつももある。

家族同士で呼び合っているのか、アンドレイだのエンゾだの、イタリアらしい(?) 名前が飛び交い、そのうち全員が座席に落ち着く。エンゾは、リュック・ベンソン監督の映画『グラン・ブルー』でジャン・レノが演じた役だった。

飛び立てばすぐわかるが、フィウチミーノ空港はローマ市内よりまだ海に近いところにある。窓から見えるのがティレニア海か。空港から南に向けて離陸し、夕日に照らされたイタリア西海岸を後に飛行機は南東に向かってイタリア半島を横断する。距離は 381 km。日本海側の新潟空港から中部国際空港へ向かうようなものだ。偶然かもしれないが、成田→ローマのフライトも、ローマ→バーリのフライトも客室乗務員は男性の方が多く、皆愛想がいい。ブレザーはもちろんアリタリア・グリーンだ。

バーリ空港へ着陸。半島の反対側だからアドリア海に面する街だ。卵から出てきたミミズのような、輪の口が開いた部分からふにゃふにゃと書いたのがバーリ空港のマークか。着陸した時点ではまだ明るかったが、空港内のロビーに到着した頃には暗かった。つまり日の入りは 9 時少し前。

預けた荷物はないから、すんなり到着ロビーへ出る。成田でも同じだが、ドアが開くと迎えに来ている家族たちの顔がのぞく。キョロキョロしながらドアを出るも、やっぱりそれらしきタクシードライバーは見当たらない。やっぱりだめか。ロビー内を 2 往復してみるも誰もみつからない。ここから再度 H 大の S 先生へ携帯電話をかけるも繋がらない。

椅子に座り、深呼吸をして覚悟を決め、立ち上がった途端、目の前に会議のロゴを配したプレートをもったクルーカットの若者が立っていた。「助かった！」思わず声をあげそうになった。彼も僕を探していたのか。僕から事務局への配車依頼は伝わっていたのだ。さすがはイタリアである。信頼に足る。そして彼は日本人らしき容貌の客を探していたに違いない。

彼は英語を解さなかったが、僕の英語だってしれたもの。片言の英語同士で用件はわかる。タクシーは駐車場に置いてあると。連れていってくれた先にはメルセデス・ベンツ。

で、どうも彼が言うにはもうひとり乗せる客がいるのだと。その名前をメモった携帯電話画面を見せてくれた。一人は僕で、もうひとりも日本人の名前だ。到着時間もメモっており、22:30 だと。つまりそれまでわれわれはここで待つわけだ。

バーリ空港は地方空港だが、稚内空港のように 1 日 3 便、夏の間だけ 6 便というような小さな空港ではない。れっきとした国際空港である。国際空港と言っても、カナダのウィニペグ空港のように、ノースウェスト機がハブ空港である米国・ミネアポリスとの間を飛ぶのに国境を越えるから、というようなことではない。ロンドンのガトウィック空港、アテネ、ケルン・ボン空港、バルセロナ、ブリュッセル、アルバニアの首都ティラナ、ルーマニアのティミショアラとかいう町にあるトライアン・ブイア空港、エジプトの国際的リゾート地シャルム・エル・シェイクの国際空港などなどと結ぶ国際空港で、1 日の発着数は 40 を超える。2006 年改装なった空港の建屋はまだ新しく、明るい。夜 11 時過ぎまで到着便があるので、迎えの人たちで賑わっている。さすがにブティックなどはもう閉まっていたが、2F の出発ロビーではまだカフェが開いていた。そういうところが嬉しい。

ロビーの椅子に腰かけて手持無沙汰にしていたら、近くに座った婦人から声を掛けられる。「今何時か」と。地元の人らしく、ご主人と娘さんと 3 人で誰かを迎えに来ているらしい。「どこに行くのか」「何をしに行くのか」と他愛のない会話をする。「Nova

Yardinia とかいうリゾート地で仕事なんだ」というと、「ああ」と素っ気ない返事。リゾート地の近くに住んでいる人にとって、すぐ隣にでも同じようなビーチと緑と空気が太陽があるのにわざわざリゾート施設には行かないだろうな。興味はない。

それから場所を変えて座っていると、子供が3人いる家族が横に陣取った。ひとりの子が売店を指差して親に何かをねだったのか、すぐにお父さんはその子連れて売店へ。戻ってきた小学校低学年らしいその女の子の手にはアイスクリーム。その子はすでにお腹がポッコリ。父親の体型とそっくりだ。もはや肥満体形だ。ゲンナリ…。子供の将来の健康をどう思っているのか、と文字通り余計なお世話を考える。まあ、待っている間退屈だから。

22:30 着のフライトはミラノからであった。しばらく待っていたら僕より少し若いくらいの日本人男性が一人、短パンにサンダルのラフなスタイルで降りてきた。さっきのクルーカットの若いタクシードライバーに促されてメルセデスに乗り込む。

N さん。三重県の会社の方で、生粋の大阪人か、純粋の大阪弁をしゃべる。関空近くのホテルを朝 6 時に出発して、フランクフルト、ミラノを経てバーリまで 26 時間かかったこと、旅行社に任せたらそのような大回りの経路で、かつ乗り継ぎに時間の余裕を見た旅程だったこと、ミラノでのイタリア入国の際にバーリ (Bari) をパリ (Paris) と聞き間違えられたうえ、職業を聞かれて科学者だと云ってもそのラフスタイルを見て信じてくれなかったことなど、タクシー内での会話。

タクシーは、空港を出てしばらくの間こそ路面が照らされた快適な道を走ったが、そのうち、舗装されてはいても背丈ほどの草むらが両側を覆う田舎道をクネクネと走る。そういう光景がそろそろわかる程度の街灯はある。空港から 80 km とは直線距離のことか、実際はえらく走ったように思う。会議事務局が用意してくれた信頼できるタクシーで、それも一人でなくて本当によかったとつくづく思った。

クネクネ道をそろそろ飽きるほど走った後、大きな木の戸が閉まった門の前に着いた。ドライバーは車を降りてインタフォンに向かって「客だ、開けてくれ」と(と思う)。戸が左に開き、メルセデスが滑り込む。なるほどここが Nova Yardinia と呼ばれるリゾートの入り口、メインゲートか。暗くてよく見えないが、回りは緑に囲まれている。

メインゲートを入ってから数分走り、白い建物の前に到着。正面に会議名とロゴが描いてあるのが見える。「さあ、ここだよ」とタクシードライバー。この建物はきっと「カレネ・コンファレンス・センター」(Calené Conference Center) という会議会場に違いない。僕が宿泊するホテルとは違う。N さんのホテルとも違う。メルセデスは再度エンジンをかけ、N さんのホテル、そして僕のホテルへと連れて行ってくれる。もう夜中の 12 時を過ぎている。おまけに

それぞれのホテルに大きな戸が閉まったゲートがある。先のコンファレンス・センターで放り出されては身動きがとれなかった。何せ N さんのホテル Alborea Hotel も、僕のホテル il Valentino も、コンファレンス・センターからそこに見える、という距離ではないのだから。

タクシー代金はひとり €50 だった。何人乗っても片道 €100 と云われていたからひとり 50 なのだ。わかりやすい。だからイタリアは信用できる。ドライバーのお兄さんも €50 とあらかじめ書きこんだ領収書を用意していた。チップとして €5 を加えて支払う。「Thank you! Grazie!」本当にそう思った。

アドリア海に面したバーリから、これでイオニア海に続くターラント湾まで到達したわけだ。地図ではターラント (Taranto) の町が示されているが、今タクシーを降りた Nova Yardinia はターラントの町から 20 km ほど離れた海沿いの地域。

実を云うと、僕の場合、タクシーをホテルの正門につけてくれたのではなかった。降りてからわかったのだがそのホテルの敷地のえらく端っこだ。降りるときに、ドライバーが、たまたま歩いていた宿泊客にレセプションの場所を尋ねて、「降りて左に曲がって歩け」とジェスチャー混じりで教えてくれた。その通り歩いていったら草むらを抜けて、プールやちょっとした広場を左右に過ぎ、木造っぽい平屋の大きな建物が近づいてきた。そうそう、この緑の中の真夜中に野外でバンド演奏がかしましく聞こえて来る。その方向から歩いてきた家族にレセプションの場所を聞く。

この時間にレセプションのカウンターには誰も待っていなかった。カウンターの前に立つと奥から中年の男性がひとり表われる。真夜中のチェックインだ。

英語は通じない。英語をしゃべることができる職員は朝 8 時から夜 10 時までらしい。それでもチャックインはできた。予約してあるのだし、クレジットカードを取り扱うことができ OK だ。

部屋は 564 号室。それはどこかという、さっき来た道をずっと戻る。ホテルと云っても高層ビルがひとつに別館、といったものではない。3 階建てのロジジというかアパートのような建物が敷地内にい





くつかある。

夜中とはいえ重い荷物を持って歩けば汗だく。アパートの入口に部屋番号を示す看板様のものがあり、500番台の部屋はとある建物の2Fだと突き止めた。看板では「Primo Piano」とある。日本で云う1Fは「地上階」だから「Piano Terra」なんだな、きっと。2Fが「Primo Piano」、3Fが「Secondo Piano」となる。

2Fの廊下に行く。「アパート」「廊下」と云ってももちろん〇〇荘のようなものではない。うまく説明できないから上の写真で示す。写真の向かって右が外、左側に部屋が並んでいる。

着いた。ようやく。朝9時に家を出てから23時間以上、不安と汗だらけの道程だった。

部屋は広くて簡素だ。大きなベッド、古いタイプのテレビ、浴槽はなくシャワー。冷蔵庫はあるが中は空っぽ。当たり前だがインターネット接続などはない。ここはビジネスホテルではない。リゾートホテルだ。部屋に居ずに外でお金を使ってくれた方がいいのだ。ラスベガスのホテルを思い出した。ホテル内のカジノで過ごしてくれた方がホテルにとっていいに決まっているから、いかにも部屋には居なさんなど云わんばかりの素っ気ない部屋だった。

荷物をバッグから出し、シャワーを浴び、明日の朝食の場所だけを確認して、ベッドへ横になる。

(今日の出費) ロープライナー ¥3,000、海外旅行保険 ¥8,250、貴重品袋 ¥1,995、アフターシェーブ ¥450、タクシー~~¥~~5.00、ホテル~~¥~~52.00 (カード)、

6月17日(水)

時差ボケと昨日1日の興奮とで眠ったか眠らなかったかよくわからないまま朝を迎える。朝4時。さすがにまだ暗いが、ベランダ側の窓を開ける。ヒンヤリとまではいかないが、暑い感じではない。

ベランダには木製の椅子がふたつ置いてある。昨夜はよく見えなかったが、建物は緑に覆われているようだった。はたして、夜が明けてから見ると、まさにその通り(右上の写真)。



7時頃、出かける。受付で参加登録をしなくてはいいけないし、朝食をコンファレンス・センターで食べる。

部屋を出て、建物を出れば陽光の下だ。暑い！太陽が眩しい。カミュの『異邦人』の書き出し、「今朝ママンが死んだ」を思い出す。主人公ムルソーが殺人のせいにした眩しかった太陽はこんなだったに違いないと勝手なことを考える。あれはモロッコか。朝早くから下の階で騒々しい一団がいた。どうも身体障害者を連れた一行らしい。もちろん皆Tシャツ、短パンである。

会場に向かうにはまずこのil Valentinoホテルの敷地を抜けなくてはいいけない。正門へ向かう。そう昨夜タクシーで入って来たところだ。正門から出ると会議会場へはえらく大回りになるのだが、初めてのことだし、敷地内に何かがあるのか知りたい。

敷地内を少し寄り道してプールの回りを歩く。このプールがホテルのウェブサイトに映っていたプールだろう。プール管理人らしきおじさんが一人何やら作業をしていた。泳いでいる客はいない。他人の格好と比較するわけではないのだが、黒いスラックスに黒っぽいビジネスシューズにカバンという出で立ち、絶対にこの雰囲気合っていない。同じような格好の参加者がいることをまもなく知る。同じ会社のS2さん。

正門へ出ると今度は会議会場(コンファレンス・センター)へ向かう。昨夜タクシーで数分だった道を逆に歩いて向かうわけだ。抜けるような青空¹。両側が夾竹桃で覆われたまっすぐの道を、炎天下歩く。眩しい。サングラスを欲しい。思ったほど汗が出ないのは、海が近いとは言え、それでも日本より湿度が低いからか。

15分ばかり歩くと、夕べ真夜中にタクシーで着いた「カレネ・コンファレンス・センター」だ。リボルビング・ドアを入ると正面がポスター発表会場か。左側に参加者受付デスクがあるが、まだ早いで係員は誰もいない。その横がレストラン入口。朝食も昼食も夕食もレストランというか大きなカフェ

¹「抜けるように」と言うのが何が抜けるのだろうか。辞書では、「抜けるように」で「透き通るさま」を言うらしい。

で摂ることができる。あらかじめ支払った参加費に込みだから改めて料金を支払う必要はない。

何百席かあるような大きくて明るい食堂といった感じだ。今居る階が 2F らしい。下を覗くと階下には庭に面した場所に何十席かが見えた。

朝食はビュッフェ（日本で言ういわゆるバイキング形式）で、好きな物を好きなだけ取って食べればいいのだが、どれもこれも甘そうで手が出ない。クロワッサン（それも大きな）が 10 種類くらいあったが、プレーンは 1 種類で、後は中にジャムとかカスタードクリームとかが入っている、日本で言ういわゆる菓子パンのようだ。水は 750 cc 瓶ごとまとめて置いてあるので、それを勝手に取って来る。炭酸入りが圧倒的に多い。飲めないことはないが、どうも今も慣れない。

皿に食料を盛り席を探していたら、カップラーメンが目に入った。日本人が 2 人、それぞれひとつずつ目の前にしていた。勿論日本からの持参品。

このコンファレンス・センターで現在行われているのはわれわれの集まりだけのようで、つまりここで食べている人たちは全員関係者だ。食事を終わって出ようとしたら、H 大の S 先生と僕と同じ会社の S2 さんと出会い、もう一度席に着く。H 大の S 先生は僕から SOS の電話を受けて、会議事務局に聞いてくれたところ、タクシーが空港に迎えに行っていると教えられた。僕に電話をしたが、しかし僕は多分機内にいて結局つながらなかった。S2 さんはバーリの街で一泊したらしい。バーリの街も物騒らしく、カバンを持って外を出歩くなと言われたとか。バーリの人たちはそれを知っていて何も持ち歩かないのか、あるいはみんなひたたくられてしまってバッグというバッグが無くなってしまったか。

3 人で話しているところへ、S 先生のところの学生の C 君が近づいて来た。去年僕のところへ夏期実習生として来て以来見知っている。最近の学生には珍しく（？）とても気配りが効く彼が、僕が参加登録をまだ済ませてないことを知って、案内してくれる。会議は 14 日（日）から始まっているが、僕にとっては今日が初日である。

登録の際、会議最終日翌日に空港へ向かうバスの予定時刻をチェック。1 時間おきに出発するようで、12 時頃の飛行機だが、十分に余裕をとって 8:00 出発にチェックマークを入れる。

もうひとつのチェックは、今日の午後にあるバスツアー。何でもアルベロベッロ (Alberobello) とかいう有名なところへ行くのだと。どこかで聞いたことがあるようなないような発音だが、世界遺産らしい。C 君が誘うままの女性に YES と返事をする。おとといの月曜日には、別の世界遺産であるマテラ (Matera) とかへ行ったとか。

コンファレンス・バッグは階下 (1F) で受け取るように云われ、階段を下りてみると、そこに男女 2 名の係員が。出てきたバッグにはたまげた。立派

な革製の鞆で、説明書によると、イタリアの職人がひとつひとつ手作りしたものだと。きっとイタリア開催が決まった何年か前から作り始めたのだろう。何せ



出席者数、つまり 700 個か 800 個必要なのだから。いわゆるビジネスバッグのように、携帯電話入れとかペン入れとかの細かい作りはしていないが、外側に傘を差しておくところもあり、風格が漂う。こんな立派なコンファレンス・バッグは初めてだ。

たまげたことはもうひとつある。その革の鞆の中にたっぷりと紙の資料が入っていたことだ。何百件かの発表の概要が書かれた分厚い本が 2 冊。いまどき、である。いまどきは CD で配布されるのが普通だが。

そのボリュームを見て焦ったのは、帰りの荷物がひとつ増えたということである。とてもじゃないがこの鞆の中身を、手提げの旅行バッグの中に収めることはできない。せっかく身軽に来たのに。

実はこの鞆をさっそく壊すことになる。ホテルでいっぱい詰め込んで無理やり閉めようとしたところ、ふたつのファスナーのうちひとつがパキッと折れてしまったのである。金属製だから大丈夫だと思って力を入れたが、陶器製だった。帰国してから修理に出すことになる。

3F の一室にインターネット接続できるように LAN ケーブルとパソコンを合わせて 20 人くらいが利用できるようにしてある。滞在中は日に 2, 3 度ここへ来てメールチェックをすることになる。

今日 17 日は実は特段の仕事がない。今回の出張では自分の仕事時間は実質 1.5 日分くらいしかない。空いている時間は、普通の人々は会議主催のエクスカージョンに出掛けるか、まさにここのリゾートのビーチで遊ぶかである。聞いてみたら、皆さん、海パンにビーチサンダルくらいは準備して来ていて、時間を見計らってビーチへも練り出そうという腹だ。スラックスに黒い靴など、僕と同僚の S2 君くらいなものだ。西洋人は毎日プールで泳いでいるよ、と S 先生。それも日中は暑いので、朝に泳ぐ。仕事が始まればそちらに集中する。それが彼らの流儀ですからね。

アルベロベッロとマテラへのバスツアーは、参加者全員を対象にした、あらかじめ会議プログラムに組んである無料ツアーだが、地元の旅行会社と提携してさまざまな半日ツアー、1 日ツアーが用意されていた。バーリへの歴史建造物 1 日ツアー、ポンペイ 1 日ツアー、レッチェ (Lecce: 踵の部分の街) のバロック調聖堂 1 日ツアー、ターラントの古代博物館半日ツアーなどなど。この辺りは何せローマ時代、

ギリシャ時代に起源がある地域だから、「古代」が売り物。僕らが今いるターラントなど起源は紀元前 8 世紀のギリシャ植民地だとさ²。

こういう長閑な会合では、すでに公職を退いた研究者が家族を連れて参加することが多い。家族と言っても日本人の場合はたいていは配偶者で、西洋人だと家族一行とか、恋人とか連れてきているようだ。同行した家族が退屈しないように主催者側がツアーをアレンジする。ある年配日本人参加者は同行した奥様とポンペイツアーに参加したとか。

ポンペイ。約 1,900 年前の紀元 1 世紀のある日、ミラノとの間にあるヴェスヴィオ火山の大噴火により一夜にして埋もれてしまった街として有名だが、ここからはえらく遠い。直線距離で 230 km 以上ある^{3,4}。朝 5 時出発だったらしい。

会議が開かれている Nova Yardinia Convention Resort は、いわば閉ざされた空間で、車がないと行動の自由はない。各ホテルの正門は大きな木製のスライディング・ドアで閉ざされている。バスでツアーに参加した日本人が、「あのドアが開くと、これで娑婆へ出られるという気がする。」と云ったとか云わなかったとか。云い得て妙。

かつて僕も国際会議の事務局を務めたことがあるが、場所は適度に田舎がよい。不便なのは困るが、都会の真ん中だと参加者は仕事に集中せず、遊びに

² 紀元前 8 世紀

- 紀元前 771 年中国で春秋時代が始まる。
- 紀元前 776 年、記録に残る最古の古代オリンピック大会がギリシャで開催される。
- 伝承によればロムルスによりローマ建国（紀元前 753 年、4 月 21 日）
- 紀元前 721 年イスラエル王国が滅亡する。
- ギリシャ人、地中海および黒海沿岸に植民地を建設。
- 日本で弥生時代が始まる。中国の戦乱の余波を受け、中国から日本に移住が続く。

³ ついでに、火山と言えばイタリアだが、長靴のつま先の先にあって、蹴飛ばされたようなのがシチリア島。シチリア島の北にエオリア諸島というのがある。ここの島々はこの海域の活発な海底火山活動により形成された。地質学に島の名前が使われていて、例えばヴルカノ (Vulcano) 島は、鹿児島島の桜島のように、爆発的に岩石や火山灰を飛ばすタイプの火山で「ブルカノ式噴火」の語源であるが、火山を表す英語ヴォルケーノ (volcano) そのものの語源でもある。また、ストロンボリ (Stromboli) 島は、伊豆大島・三原山のように、間欠的にマグマの飛沫を空高く吹き上げる激しい噴火を示す火山のタイプ「ストロンボリ式噴火」の語源である。ストロンボリ島の噴火は何千年も続いており、夜に海上から見える赤いマグマは「地中海の灯台」と呼ばれる。(鎌田浩毅『火山噴火—予知と減災を考える—』岩波新書)

⁴ ポンペイの南にティレニア海に突き出した小さな半島がある。この半島の南側にアマルフィ (Amalfi) という街があり、その辺りの海岸をアマルフィ海岸という。映画『アマルフィ』と関係があるかどうかは知らない。佐藤浩市を主演に置かない映画に興味はない。

出掛けてしまうからだ。そういう意味では今回の場所選びは合格点なのかも知れない。因みに今回第 14 回を迎えたこの会議の前回第 13 回は、東京は早稲田大学で開催した。

この日、午前中は、階下のテーブルに座り、もらった大部の資料に目を通したり、日本から持ち込んできた原稿のチェックをしたり、あるいは会場をうろうろしたりして過ごす。階下のテーブルのある空間は直接外に通じており、屋外は、強烈な日差しと、その日差しを漏らすまいといわんばかりに葉を茂らす植物たち。

昼食を済ませ、いよいよ世界遺産、アルベロベッロ (Alberobello) へ。バス 4 台に乗り込む。それぞれに 2 名ずつツアー・コンダクターが付き、目的地までこの地域の地理・歴史・特産品 (オリーブ) などなど紹介してくれる。もちろん英語である。イタリア語ではない。40 分ばかりだろうか、駐車場に到着。ここで降りて、20 人ばかりでグループを作り、添乗員の後にゾロゾロついていく。

初日に登録した際に、例の革のコンファレンス・バッグの中に白い帽子 (キャップ) が入っていた。大げさなときとは思ったが、今わかった。これは必需品だ。キャップとサングラス。それに格好は T シャツに短パンにサンダルだろう。ここでも僕は浮く。

炎天下にアスファルトの上を歩くのはこんなに暑いものなのか。肌はじりじりと焼かれる。

アルベロベッロはひとつの大きな建造物ではなくて、この辺りのなだらかな丘に建つ、「トゥルッリ」(trulli) と呼ばれる、特殊な技術で作られたどんぐり型の家屋群が世界遺産である。トゥルッリの詳細は旅行書やウェブサイト任せだが、昔占領されてセメントなどの材料も奪奪されたとき、この地に産出する石灰岩の薄片を、モルタルなどの接合剤を使わずに何重にも重ねて円錐形の屋根を作った。壁は白く、内部は外から想像するより広い。

両側にこういった家が並ぶ幅数メートルの参道が観光のメインストリートで、ということはつまりその両側の家々は土産物屋である。そう、町全体が観光の町と化しているのだ。名産品のひとつが甘いリキュールらしく、いろいろな味のものがあって、コーヒーに入れるとおいしいと云っていたココナッツ・リキュールと、もうひとつかすかにオレンジ色がかかったの小瓶をひとつずつ買う。

この地にはよほどたくさん日本人が来るのか、日本語で「いらっしゃいませ」などと書かれた看板やプレートを掲げている店が多い。そしてそのうち 1 軒は正真正銘日本人女性の店だった。陽子さんという、40 代に見える小柄なその女性は、何年前にこちらに嫁いで来たのだという。ご夫婦で土産物屋を営んでいて、「私の家は TBS にとり上げられました。どうぞごゆっくりご覧になっていって下さあ

い。」と宣伝していた。食品、つまりいずれ消えてなくなるもの以外、土産物購入禁止令を家族から言い渡されている僕にしては珍しく、トゥルッリを模した鍋掴みを買う。多分実用にならない。飾りです。

陽子さんは家の中も見て行って下さい、なんて親切に言ってくれた。トゥルッリの中はシンプル。廊下などはなくカーテンで仕切られていて、寝室まで見せてくれた。屋上へ抜けられるようになっている家があり（それがまた客寄せにも使われているのだが）、トゥルッリ群の屋根屋根を眺めることができる。

陽子さんの家ではないが、屋上まで上がったら、妙に日本語を知っている地元の青年が、トゥルッリの歴史や作り方を、実物の石と写真やら図面を持ち込んで説明してくれた。そこへ、われわれと同行しているツアー参加者は地質学や鉱物学の専門家だから、学術的な質問を含め話に花が咲く。質問をしている背の高い老人はケンブリッジ大学の世界的に高名な学者らしい。

しかし、暑い。そこで店の人がココナッツ・リキュールをお試し下さいなんて持って来て、冷たいそれがおいしいこと。それで先のリキュール購入へと。よくぞ熱射病にならなかったと思うが、陽子さんによると、暑さはこれからが本番で、気温 48℃まで上がったことがあるらしい。それから、さすがイタリア、こんな田舎の観光地にも、土産物屋に挟まってサッカーグッズの店がある。僕はサッカーには全く疎いが、この辺りではセリエ A の 20 チームのうちのどのチームを応援するのだろうか。

さて、今日訪れたアルベロベッロの他に、この近郊にはマテラ (Matera) という世界遺産がある。こちらは、サッシ (Sacci) と呼ばれる洞窟住居の町。1700 年頃に作られた人畜同居の洞窟群である。1956 年まで貧しい農民たちによって使用されていたとか。月曜日にこちらへのツアーがあった。参加者によると、あふれんばかりの日本人観光客と日本人観光客用の土産物に圧倒されたとか。

アルベロベッロの参道を降りてきたところのテラスで日本人数人集まってビール。うまい。この辺りではペットボトルの水を売っている店さえ見当たらない。

つくばから来ている若い研究者と、来るときのバスで横に座ったイラン人女性との顛末がこのときの話。そのイラン人女性は子供の頃神戸に住んだ経験があり、「おはよう」「こんにちは」「次は終点です」の 3 つの日本語を知っている。彼女は研究者で、修士号を持っている。で、彼の方は博士号を持っているのだが、お互いの研究内容を話しているうちに、彼の方は、日本人にありがちなのだが、遠慮気味に話す。それを彼女は「あなたは博士号を持っているのだから、もっと自信を持ちなさいよ。」と説教していたらしい。彼の上司二人が彼の直前の席に座っていたのが不幸だった。これ以後、彼と会えば「イラ

ン人の彼女はどうなった」とか「日本国籍をとるために結婚を狙っているんじゃないか」とか、周りは勝手なことを言ってからかうハメになった。

その彼は写真が趣味で、デジカメで写真を撮りまくる。今回も 600 枚を越えたとか。そのうちの 200 枚程度を旅の記念にもらった。僕はうかつにもデジカメがバッテリー切れ。

夕方 8 時頃、日差しがようやく弱くなった頃にコンファレンス・センターに戻る。そして夕食。

ここで、このコンファレンス・センターでの食事について。すべてビュッフェ方式で、朝食メニューは毎日同じである。昼食も夕食も毎日同じで、昼食と夕食時はワインは飲み放題。たくさんの種類の食べ物所狭しと並んで、それは壮観だ。壮観だが、早々に飽きる。2 日目くらいから皿に取るものが大体決まって来る。

この辺りはプーリア州という。強烈な太陽、そして海に面している、ということから、キーワードはオリーブ油・香草、海産物、野菜である。そしてパスタ。パスタも魚も野菜もオリーブオイルがまぶしてある、というイメージ。昼食も夕食も。白ワインが合う。パスタは耳たぶの形をしたものがこの辺の特産だとか。そう言えばおいしいチーズが見あたらなかったね。まあ、外国へ行ったときの恒例ですが、コレステロールをしっかりと補給した。

夕食時には、民族衣装をまとった少女数人 (少女と言っても顔にあどけなさが残るからそう思うだけで、中には僕より背が高そうな娘もいる) と楽器をもった男達数人の一団がテーブルの周りを練り歩く。

(今日の出費) リキュール 2 本 €14.00、鍋掴み €10.00、絵はがき €4.00

6 月 18 日(木)晴れ

今日は日がな 1 日ホテルに籠って、日本から持ち込んだ仕事を進める。会場に向かったのは 3 度の食事とメールチェック、そして夕刻 3 時間ほどの研究成果説明だけだ。そのあと日本人の仲間数人と階下のテラスでビールを飲み談笑。

ビーチに出掛けたらトップレスがひとり居たとの報告あり。いるだろうね。でも人によっては whale watching 的な場合もあるから、トップレスというだけで慌てて見に行くのは危険である。一応「女性なのね？」と聞いておいた。

ホテルの部屋でベッドに寝ころんで、ようやく旅行書『地球の歩き方』に目を通す。イタリアと言えば、首相はベルルスコーニで、女性問題で賑やかな人。最近では地震被害地で G8 会議を主催、くらいしか知らなかった：

- ・ イタリアは 20 州から成る。独立心が強く、国としての統一が遅れた。

- ・ トスカーナ州というのはよく聞くが、ワインで有名？ピサの斜塔はこの州だが、僕にとっては、映画『007 慰めの報酬』の舞台のシエナの方が興味がある。
 - ・ 『地球の歩き方』では、イタリアの5大都市は、北からミラノ、ベネツィア、フィレンツェ、ローマ、ナポリ。
 - ・ 僕が知っているミラノは、宮崎駿の『紅の豚』の舞台で、ミラノ・コレクションで有名。ベネツィアは、映画『ニキータ』でニキータが“仕事”をしたところ。フィレンツェは、『ローマ人の物語』の塩野七生さんが住んでいるところ。ローマは1日にして成らなかったところ。そしてナポリは、別府湾、鹿児島湾、伊豆大島の岡田港、熱海、茨城の大洗サンビーチ、同じく茨城の阿字ヶ浦が「東洋のナポリ」と謳っているように海があるところ。
 - ・ フランスから国境越えの電車行がすばらしいらしいコモ湖は、ミラノを州都とし、北辺をスイスに接するロンバルディア州にある。アルプスの南麓にあたり、湖水地方と呼ばれる。
 - ・ 今僕がいるところは、南部3州とまとめられているうちのひとつ、プーリア州という。
- …等々。

(今日の出費) ビール代チャージ €20.00

6月19日(金)晴れ

今日はイタリア式発表風景を報告せねばなるまい。

今日は丸1日発表会場に閉じこもって研究者たちの成果を聴講。発表会場がまた少々離れたところにある。受付があるメインの会場から一旦外に出て、草むらの中の小径(もちろん整備されているが)を2,3百メートルいくと平屋の離れみたいなものがある。それが会場。ホワイト・ルームだのブルー・ルームだのと部屋に名前がついていて、僕の目的会場はオレンジ・ルーム。入ってみてわかったが色は壁の色を表す。

離れみたいだとは言っても会議室であるから、プレゼン用の道具一式は揃えられている。2,30人程度の椅子が並ぶコンパクトな会場で、気楽に参加できていい感じ。ドアの外は花と緑と太陽。

マイクなしでも済ませるくらいのこじんまりした部屋だが、発表者はさすがに20分しゃべるにはマイクは必要だろう。20分のプレゼンが終われば質疑応答の時間に入り、聴衆(フロアー)から手が挙がる。僕が知る限りの今までの経験では、会場の脇の目立たないところに、主催者側のスタッフか学生アルバイトがマイクを持って待機しており、手が挙がるとササッと質問者のところへ走ってマイクを渡す。

しかし今回は違った。部屋の壁際に座っているのは、僕より背が高い、180cmは優に超える、脚が長



い、日本人参加者の間で「レースクイーン⁵」と呼んでいた、きれいなお姉さんである。20分のプレゼンが終わると彼女は徐(おもむろ)に立ち上がり、フロアーで手が挙がるのを見つけると、彼女は会場に1本しかないマイクを受け取るためにまず発表者に向かう。

僕が知る限りの今までの経験と違い、彼女はササッと動いたりはない。あくまでエレガントに近づく。カツっ、カツっヒールの音を響かせながら。ササッと動くなど彼女たちのやり方ではないのだ。彼女は発表者からマイクを受け取り、次にフロアーにいる質問者に向かって歩き始める。カツっ、カツっ。そうしてようやくマイクが質問者の手に渡った頃、質問はもうほとんど済んでいるのだった。

次にその質問に対して発表者が答える番であり、彼女はマイクをまた発表者に渡すべく歩き始める。マイクを渡す頃には回答は終わっている。部屋は小さくて発表者とフロアーは近いので、マイクなしでも聞こえるのと、人は普通聞かれたことに間を置かず答えようとするから、マイクを待たずに会話が進んでしまう。そうして彼女は本来の役目を果たすことができないのだが、まあ、20分置きに優雅に会場を歩くお姿を披露することが契約内容かも知れない。

質問時間が終わり、進行役が「では次の発表に移ります」と宣言すると、彼女はゆっくりと壁際の席に戻り、長い脚を組み、爪を噛みながら、彼女には興味を持ちようのない話題に20分間耐え、次の出番を待つのである。

1日のセッションを終え、また昨日のテラスでピ

⁵ 「レースクイーン」(race queen) は和製英語であるが、驚いたことに英語版 Wikipedia にはすでに掲載されている。「レースクイーン」という日本語まで表記されている。韓国や中国でもこの和製英語のまま使用されているが、英語版 Wikipedia を読む限り、いわゆる英語本来の promotional model とか paddock girl の意味を外れているように思える。

この話を知り合いのアメリカ人に伝えたら彼女は大いに笑っていたが、paddock girl を知らなかった。彼女はスポーツ音痴だから仕方がないが、paddock は競馬場のパドックだから、paddock girl はわかりにくいだろうね。

ールを飲む。カウンター的女性は何故かいつもわれわれに対して不機嫌だ。イタリア弁をしゃべらないからだろうか。

今夕 20 時からはコンファレンス・バンケット、つまり会議の正式なディナーである。昼間仕事をした会議室よりさらに奥の方のレストランがディナー会場だった。レストランの横にはプールがあり、幻想的な照明が施してある。暑くてたまらないが、ディナーだから皆それなりに身なりを整えて来る。汗っかきの僕はさすがにネクタイは遠慮し、普通にドレスシャツとスラックスに。というかそれしか持ってこなかったのだが。

10 人掛けの丸テーブルがたくさん。400 人くらいはいるだろうか。レストランは内部で弧を描いて湾曲しているので、向こうの端まで見渡せない。料理はフルコースだが、あまり重くなかった。何という料理かちっともわからなかったが、やや生臭い魚料理があったことは覚えている。3 人のバンドのライブ。イタリアでは有名な歌なのか、時々歓声上がる。3 人ほどの研究者が表彰される。うちひとり日本人の F さんで、その発明がもっとも注目されたということらしい。

レストランの外にはカウンターバーがあったが、いい加減ワインを飲み、同席の日本人としゃべりすぎたと思うほどしゃべって疲れたので、バーはパス。隣のホテルのロビーを抜け、両側を夾竹桃に囲まれた暗い道を歩き、間違えたと思って引き返し、果たして近道になったのかどうかわからないが、こうして最後の晩は過ぎた。

いよいよ明日は帰国の途に着く。酔った頭を精一杯働かしながら、ベッドの上で荷物をまとめる。例の立派な革の鞆があるから、日本から持ってきた旅行バッグは、来る時と違って、チェックインの荷物にせざるを得ない。そこへアルペロベッコで買ったリキュールを入れる。下着などを何重にも巻きつける。鞆が投げられても割れませんように⁶。

6 月 20 日(土)晴れ

最終日。滞在中ずっと晴れだったが、この地に雨は似合わないな。想像できない。

今日は朝 8 時にバリー空港行きのバスが来る。というか、4:00, 5:00, 6:00, 8:00, 10:00, 12:00, 14:00, 16:00 のうちどれを選ぶかと 3 日前の受付の時に聞かれて 8:00 と答えたのだ。フライトは 12:05 発だから 10:00 のバスが手頃なのだろうが、時間に余裕を持ちたい。何が起こるかわからない。

8:00 に出発しようとするれば、7 時半には朝食を済

⁶ 帰宅して荷物を開いたら少量が漏れ出ている、まきつけておいた T シャツの一部がネトネトだった。ガラス栓とガラス瓶とをセロテープ様のシールを巻きつけただけで留めてある。しかし割れてはいなかったから OK。

ませておきたいし、その前にいつものようにメールチェックも済ませておきたい。インターネットルームには、「一人 20 分以上使うな」と張り紙がしてあるが、数十件のメールを処理しようと思うと、とても 20 分では終わらない。

ということで、早朝 6 時にチェックアウトをすることにした。4 日前の夜中に来た道を、所持品を全部持ち、今度は明るい陽光の中をレセプションへ向かう。昨日の明るいうちにこのレセプションがある建物の中や周りを歩き回っておいたが、大きなレストラン（豪華というわけではないが、このホテルのメインレストランでしょう）と何軒かのショップがあるだけで、土産物を買おうという気にもならなかった。だから、この建物には未練はない。

英語の通じる職員は 8 時からしか勤務しない。この前チェックイン時に対応してくれた男が今日も出てきた。このホテル内ではミネラルウォーター 1 本、ワイン 1 本、何にも買ってない。消費に貢献していない。宿泊だけだったので、精算は実に簡単。ただ、事前に支払った手付け金を差し引いてくれるというので会話をしただけだった。彼はパソコンの画面上の数字を指さして、懸命に手付け金の €100 を返すと言うのだ。無事現金で返ってきた。しきりに「チンチン」「チンチン」と聞こえるのは、数字の「55」を読んでいたのだな。イタリア語で数字の「5」は「クインケ (cinque)」と言うらしい。ともかく、返金分を言い忘れるところだったので有り難い。善良なおじさんなのだ。

ところが、これが小銭となると誤魔化しにかかる。アメリカの友人に絵はがきを 1 枚書いた。投函したので切手を欲しい、とジェスチャーで示したら、「はがきは預かる。こちらでスタンプを押して投函する」らしいことを言った。それでいくらかと聞いたが、数字を答えられているのか、何を言っているのかチンプンカンプンなので、とりあえず €5 紙幣を 1 枚差し出した。おつりが来るだろう、と思うのは日本人で、彼はすんなりそれを引き出しの中に入れたのだ。大した金額ではないし、微笑ましいものだが、そこはいかん。自分で切手を買うからと言って紙幣を返してもらおうと手を出したら戻してくれた。

荷物を持って、汗をかきながら夾竹桃の中をコンファレンス・センターへ。最後の朝食を終え玄関へ行くと、すでに何人かが集まっていて、さらにどんどん膨れ上がって来た。建物の中を振り返ると、併設するホテルのチェックアウトにずら一と並んでいる。対応する係員は一人だけ。日本じゃあり得ないですな。すんなり清算が済む人はいいが、何か引っ掛くと 10 分も 20 分も待たされるという感じ。このノロさを避けるために、友人の日本人たちは昨夜のうちか、または今朝早朝にチェックアウトしたとか。チェックアウトに時間を食ってバスに乗り遅れるとあとが困る、とかいうことはホテルの従業員は考えないらしい。こう書くと、外国慣れた人は「そ

んなもんだよ」と、典型的な他人事の突き放し的言辞を吐くが、当人にとってはたまったものではない。

8:00 のバス、とあって 8:00 に来るわけではない。しかし、15 分遅れくらいで、来た。上出来、上出来。1 台。集まっている人数を見れば 1 台で足りるわけではない。受付の時に確認した返事を数えればわかりそうなものだ。と思うのは日本人で、イタリアでは、「あー、8 時のバスの希望者は 50 人、プラスマイナス 20 人、1 台でいいか」ってなもんだらう。

案の定、あふれる。荷物をバスの横腹に入れ、いざ乗り込もうとしたら、割り込む割り込む。それもいい歳をした頭が禿げあがったおじさんたちがそういうことをする。日本ではお婆さんたちがそーゆうことをするが、イタリアではおじさんたちもする。

バスの運転手は車中で席の数を確認している。こんな多いとは聞いてなかった、といわんばかりの表情だ。どンドン入り込むのを慌てて手で制して、少し待てと。そこで割り込んできた禿げ頭のおじさん、何やら（おそらく）イタリア語で運転手に向かって叫んでいる。おじさんと運転手の仕草から推測するに、おじさんは「家内が先に乗ってるんだ！」と叫んだのだ。

おじさんパワーに負けじと乗り込む。なんとか座れた。僕の後にはほとんど乗って来なかった。運転手がこれ以上は無理だとせき止めているのだらう。けどお婆さんが一人乗り込んで来て、ふと気がつくと、さっき「家内が先に乗ってるんだ！」と叫んだおじさんの横に座ったではないか。これはいい。作戦勝ち。この機転のよさには見習うべきものがある。しかし、こういった機転を利かせるには普段からの訓練が必要。日本で鍛えることができるか。

乗れない人、少なからず。日本のハイウェイバスなら、1 台でさばききれないとわかった瞬間追加のバスの発注がかかっているが、ここであり得ないだろう。乗れなかった人を残したまま、やがてバスは出発し、おそらくは 4 日前の夜中にタクシーで通った道を逆に北に向かって走る。よく整備されて走りやすそうな道だ。快適にドライブできるかどうかは、空港など大きな施設内の動線と同じく、標識の位置とわかりやすさによるところが大きい。

バスの中で、つくばの研究所から来ていた日本人が携帯電話で誰かとしゃべっている。連れて来ていた若い同僚がこのバスに乗車拒否されて、マイクロバスが手配された。安心する。その若い同僚とは、例のアルペロベッツアーのバスの中でイラン人女性に説教されていた彼だ⁷。

⁷ バスに乗れなかったところの実状はどうやらかなりひどかったらしい。当の彼が、ある学術雑誌に書いた参加記の一部を紹介する：「最終日の 20 日に少し波乱がありました。もう帰路につくだけだったのですが、会場から出発するバーリ空港行きのシャトルバスに参加者が半数以上乗れなかったのです。事前にバスの乗車予定時刻を申告していたのに、全くバスの台数が足りないことに啞然としま

バーリ空港到着。空港はバーリの街の郊外にあり、辺り一帯が整備中。明るい中で見るとバーリ空港はきれいな空港だ。すぐにチェックイン。来るとき機内持ち込みだった手荷物を今度はチェックインし、イタリア人職人の手による革の鞆を機内持ち込みに。

同じバスで到着した何人かの日本人は、ここから先の旅程は同じではない。僕はローマ経由で成田へ。H 大一行はローマへ向かい、今日はローマで一泊。つくばの一行はミラノ経由で成田だが、ミラノで乗り換えるのに数時間の待ち時間があり、街中へ遊びに出るかどうかで迷っていた。

かなり時間があるので、カフェへ。エスプレッソを頼む。ここのお姉さんは普通にてきぱきと対応してくれた。さすがに国際空港。本屋へ入る。今回は隔離された場所に居たから、珍しく地図を買えなかった (Nova Yardinia の中には本屋はなかった) ので、ここで買おうとしたが、どこかの都市の地図ばかりで、イタリアの地図さえ見当たらなかった。切手を買った。今朝 6 とられそうになって、アメリカへのはがきをまだ投函してなかった。アメリカまでの切手は €0.68 だった。その場で貼って空港の外のポストに放り込む⁸。

保安検査を受けて出発ロビーへ。各国へ戻る会議参加者が大勢。皆例の革の鞆をもっているからわかる。チョコレート屋さんで職場への土産のチョコレート。

そこへまた会議場でみかけた日本人が到着した。彼が云うには、コンファレンス・センター 8:00 発のバス（つまり僕らが乗ったバス）は、実は会議参加者の宿泊しているホテルに寄り、彼らをピックアップすることになっていたはずだと。しかし、彼を含む数人がホテルで待てども待てどもバスは来ない。彼らはコンファレンス・センターへ行き、事務局に訴

した。余裕をみた出発時刻にはしていましたが、もしもの事を考えると気が気ではありませんでした。20 分ほどしてもう一台バスが手配されてきたのですが、これにも全員は座れませんでした。バスに乗り込む様相は、まさにタイタニックさながらでした。結局 7 人が立ったままバスに乗り、10 km ほど移動した先でワゴン車に乗り換えて空港に向かうことになりました。筆者ももちろん 7 人のうちの一人になりましたが、驚くべきことに他の 6 人も皆さん日本人の方々でした。これは外国の方々がかうした時の競争に強さを発揮しているという見方もできますが、日本人が同乗していなかったらどうなっていたことか、日本人が同乗してよかったでしょうと言いたかったです。また後で伺ったことでしたが…」（この後の既述は上記の置いてきぼりにされた話。）

⁸ アメリカの Jude McMurry には旅先から絵はがきを書くことが習慣になっている。一昨年、ベルギーはブリュッセルでムール貝を食べた報告の 3 枚セットのはがきは、確か街中のポストに投函して結局 Jude に届かなかった。今年の 5 月にウィーンで投函した 4 枚セットは、郵便局で投函したにも拘わらず未達。そして今回のイタリア発は届いた。何ということだ。ベルギー、オーストリアがダメでイタリアから届くとは。だからイタリアは信用できる。

え。そこで事務局の対応者は自分の責任ではないのだと責任回避ばかりして対策をとろうとしないものだから、同行のドイツ人参加者が激怒。ようやくバンを1台手配させたのだと。なんとまあラテン系にありがちな対応。だからイタリアは信用できないのだ。

パリ発 12:05、ローマ着 13:20。AZ1604 便。

ローマ空港の中では、4日前に通って来た通路を逆に辿る。今回乗り換え時間は1時間半。来るときよりは余裕があると思っていたが、予想外だったのは、到着便が立て込んだのか、来る時はすんなり通れたパスポートチェックに人があふれ、ここを通過する列に並んでいる間に20分程度を費やした。並んでいる間に焦り始める。

小走りでスカイブリッジシャトル乗り場まで行き、降りた後も小走りで出発ゲートへ。すでに搭乗が始まっていた。出発ゲート付近のカフェや土産物屋を眺める時間もなし。偶然同じ職場の社員と会う。同じ飛行機だ。

ローマ 14:50 発成田行き AZ784 便。定刻に出発。機内では食べて寝る。来るときは洋食を選んだが、今度は和食にした。

(今日の出費) 切手 €0.68、チョコレート €11.00+16.80

6月21日(日)東京は曇り

午前10過ぎ、ほぼ予定通り成田着。29℃とか。曇りで29℃は蒸し暑かろうと思ったとおり、空港ターミナルへ入るとむっとした。預けた荷物が出てくるのが意外と遅い。待っている間廻りをキョロキョロしていると、例の同じコンファレンス・バッグを持った人が3人。うちひとり北見工業大学の先生だとか言っていた。ここから羽田へ向い、それから北海道か。成田からどれくらいかかるのだろう。最寄りの空港は女満別(めまんべつ)空港。「乗換案内」

成田空港第一ビル	10:40	15:20
(空港連絡バス)	↓	↓
羽田空港第一ビル	12:05	16:25
羽田空港発	12:40	17:00
	↓	↓
女満別空港着	14:30	18:40
女満別空港発	15:10	18:50
(空港連絡バス)	↓	↓
北見	15:52	19:32

で調べてみた。もっと早ければ新千歳乗換え女満別というルートも利用可能。

午前中に成田空港に到着出来ていれば、その日のうちの無理のない

時間には北見に到着できるということだ。

水戸へ帰るローズライナーは10:25発。到底間に合わない。初めて知ったのだが、この後4時間に亘って発車はなく、次発は14:30とのこと。待ち切れないので東京経由で電車で帰ることにする。

初めての京成電鉄スカイライナー。全席指定で指

定券(スカイライナー券)920円、日暮里までの乗車券1,000円。途中停車駅は京成船橋のみ。日暮里で常磐線普通列車に乗り換えて上野駅で下車した。日暮里で降りず終点の上野まで行けるが、京成上野駅とJR上野駅は少し離れていて不便だ。

上野駅atreの寿司屋で昼食。雨模様とは言え、日曜日昼過ぎで人手は多い。14:30発フレッシュひたちで水戸へ。

(今日の出費) 京成スカイライナー 1,920円

さて、例のファスナーが壊れた、革製のコンファレンス・バッグ。水戸でも数少ない修理をしてくれる店を見つけて預けた。ご主人が云うには、イタリアのバッグのファスナーはスイス製で、同じ物が手元にあるかどうかわからない、とのこと。数日後修理完了の電話があり、店に取りに行ったところ、もうひとつの無事なファスナーとは似ても似つかないファスナーがついていた。でもそれはそれでバッグにマッチしていたし、鍵を付けられるようにと孔まで作ってくれた。500円也(!)。このバッグはピアノ教師の義理の兄に差し上げた。僕では貫禄がない。